

# ユネスコスクール活動事例集

## 第 5 集

# 目次

ユネスコスクール 活動事例①	<b>名古屋市立鳴海小学校</b>	2
ユネスコスクール 活動事例②	<b>江南市立宮田小学校</b>	4
ユネスコスクール 活動事例③	<b>半田市立有脇小学校</b>	6
ユネスコスクール 活動事例④	<b>東浦町立藤江小学校</b>	8
ユネスコスクール 活動事例⑤	<b>西尾市立西尾小学校</b>	10
ユネスコスクール 活動事例⑥	<b>豊橋市立東田小学校</b>	12
ユネスコスクール 活動事例⑦	<b>新城市立作手小学校</b>	14
ユネスコスクール 活動事例⑧	<b>豊田市立前林中学校</b>	16
ユネスコスクール 活動事例⑨	<b>豊橋市立高豊中学校</b>	18
ユネスコスクール 活動事例⑩	<b>名古屋国際中学校</b>	20
ユネスコスクール 活動事例⑪	<b>名古屋市立山田高等学校</b>	22
ユネスコスクール 活動事例⑫	<b>愛知県立刈谷高等学校</b>	24
	<b>愛知県ユネスコスクール交流会</b>	26

## はじめに

---

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、1953（昭和28）年に創設され、①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育、といったテーマについて、質の高い教育を実践する学校です。世界181か国で11,000校以上のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校は、1,034校を数えます（2017（平成29）年10月現在）。愛知県では、2014（平成26）年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールへの加盟が進み、現在申請中を含め167校が活動しており、国内最大規模となっています。

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールをESDの推進拠点と位置付け、その活動の質を確保するため、ユネスコスクールガイドラインを策定しています。そこには、ユネスコスクールとして大切なこととして、「国内外のユネスコスクール相互間のネットワークを介して、互いに交流相手の良さを認め合い、学び合うこと」が第一に挙げられており、交流の促進を図ることが重要であるとしています。

愛知県教育委員会では、本年度、ユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業を実施いたしました。具体的には、児童・生徒・学生・教員等が交流し、学び合う「愛知県ユネスコスクール交流会」の開催をはじめ、ユネスコスクールへの研修講師派遣、全国大会等研修会への教員派遣等です。

2017（平成29）年3月に公示された小・中学校学習指導要領においては、前文及び総則において、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられており、各教科においても、関連する内容が盛り込まれています。持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力を育むには、新学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や「カリキュラム・マネジメント」の具体的な実践が重要です。すべての学校において、これまでユネスコスクールで先進的に取り組まれてきたESDに関する教育実践の共有・活用の促進がなされることが期待されます。

本事例集は、県内各地でESD活動に取り組むユネスコスクールの実践をまとめたものです。ユネスコスクールへの加盟の有無を問わず、全ての学校のESDの充実と広がりにつながるとともに、未来を担う子どもたちの力を育むきっかけとなることを願っております。

結びに、本事例集作成に当たり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会をはじめとした関係の皆様にご心より感謝申し上げます。

2018（平成30）年3月

愛知県教育委員会

---

環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

# 名古屋市立鳴海小学校



創 立：1873年

住 所：〒458-0801 名古屋市緑区鳴海町字矢切98番地

連絡先：TEL 052-623-0070 FAX 052-622-6526

学級数：22 児童数：663人

H P：http://www.narumi-e.nagoya-c.ed.jp

## 地域の人との交流を生かした学校行事

### はじめに

本校は144年の歴史と伝統があり、学区には多くの史跡や伝統工芸が受け継がれている。この特色を生かして、これまでも地域の伝統工芸である鳴海絞りの歴史と技法を学ぶ活動や東海道五十三次の宿場町として知られる地域の歴史を学ぶ活動について、毎年力を入れて取り組んできた。また、地域の方々と学校行事や学年行事を中心に

さまざまな交流を行ってきた。

そこで、地域の歴史・文化・産業等を学ぶ活動と地域の人との交流を関わせ、①地域の環境美化を目指す活動を「環境学習」②鳴海絞りと地域の歴史を学ぶ活動を「地域遺産学習」として、学習活動計画を再構築することで、持続可能な開発のための教育（ESD）を推進していくことにした。

### 実践内容①

## 「鳴海小クリーンキャンペーン」

**ねらい：地域の清掃活動を通して、地域に愛着をもつとともに、地域環境を守ろうとする気持ちを高める。**

名古屋市の「環境デーなごやトライ&アクション」の一環として、「鳴海小クリーンキャンペーン」を児童だけでなく、保護者や学区の人と協力して行った。今年度は、学校の敷地内や通学路だけでなく、学区内の公園や川沿いの歩道なども清掃することにした。

始めに、区政協力委員長の挨拶と児童会美化委員会からのクリーンキャンペーンの趣旨説明を行った。その後、各学級に分かれて、それぞれの掃除区域に向かった。低学年は主に校内の清掃、高学年は通学路や公園、扇川沿いの歩道の清掃を中心に取り組んだ。

校内の清掃に取り組んだ低学年の児童は、保護者や地域の人と一緒に落ち葉拾いや草取りに取り組んだ。児童の力だけではきれいにできない部分を、保護者や地域の人

の力を借りてきれいにする事ができた。地域の人が袋の口を持ち、児童が集めた落ち葉を袋に入れるなど、和気あいあいと清掃する姿が見られた。また、地域の人から「きれいになったね」と声を掛けられたことで、児童たちは達成感も味わうことができた。

校外の清掃に出かけた高学年の児童は、道路や公園でゴミを見つけると進んで拾うことができた。また、予想していたよりもゴミが少なく、自分たちの街がきれいなことに気付くとともに、このきれいな環境を守っていききたいという気持ちが大きくなっていったようである。

清掃後、児童は、「きれいだと思っていたところにもゴミが落ちていていやな気持ちになった」「私たちの街は予想していたよりもきれいだと思った」など感想を発表することができた。



地域の人や保護者と一緒に清掃する児童

### 成果

児童が普段から利用している通学路や公園等を清掃したことで、見落としがちな小さなゴミにも気付き、一生懸命に掃除をする姿が見られた。「ゴミがあつていやだ」「ゴミを捨ててはいけない」と、自分たちの住む地域に愛着をもち、環境を守っていきこうという気持ちを高めることができた。

## 実践内容②

## 「鳴海絞り体験」

ねらい：鳴海絞り体験を通して、伝統工芸を伝えていくことの大切さを知ることができるようにする。

## 4年生の絞り体験学習

児童が学区の鳴海絞り店に出かけ、Tシャツやバンダナ、陣羽織の絞りと染めを行った。鳴海絞りにはさまざまな技法があり、児童の力だけでは難しいときは、職人の方の指導の下、保護者の力を借りて行うことにした。

始めに、地域の鳴海絞り店の方より、地域の歴史や伝統工芸についての話を伺った。

その後、鳴海絞りのさまざまな技法を教えていただき、児童は思い思いの作品作りに取りかかった。見よう見まねで布をたたんだり、輪ゴムを使って絞ったりしていた。

染色のときは、熱せられた染料に布を入れるため、職人の方や保護者に手伝ってもらいながら作業を進めた。染め上がった作品を広げるときには「わあ!きれい」と完成品に感動する声も上がっていた。同じ図案でも、一枚一枚の出来上がりが違う絞り染めの魅力や難しさに気付くことができた。

完成したTシャツやバンダナは、校外学習や5年生での中津川野外学習のときに学年や学級で揃えて着用することで、団結力を高めることにもつながった。

運動会では、自分たちが作った陣羽織を着て学年演技や全校演技をしたり、応援合戦に取り組んだりして、盛り上げることができた。全校演技では、地域のダンスチームや保護者と一緒に踊り、交流を深めることもでき、大変好評であった。



鳴海絞り体験をする児童

## 6年生の絞り体験学習

児童は、2月の授業参観のときに、保護者と一緒にハンカチ

の絞り体験を行った。出来上がったハンカチを使って、卒業式に身に付けるコサージュに仕上げた。ハンカチのデザインは、卒業式の服装などに合うように、保護者と相談して色や絞り模様を考えて作った。

また、卒業式の会場を飾る、長さ20mの横断幕を鳴海絞りで作った。そこには保護者一人一人からのメッセージが書き込まれ、児童たちは、地域の伝統工芸に見守られながら卒業していき、感動を呼んだ。

## 鳴海絞りクラブの絞り体験学習

本校では、地域のボランティア活動として「見守り隊」が結成されており、登下校時の児童の安全を見守ってくれている。交通安全感謝の会では、地域の見守り隊の方を招いて、鳴海絞りクラブの児童が作ったハンカチをプレゼントした。

児童は、ハンカチを絞るときに、日頃の感謝の気持ちを込めて、1枚1枚丁寧に作ることができた。地域の伝統工芸を用いて、地域の方へ、日頃の感謝の気持ちを伝えることができた。



陣羽織を身に付け応援する児童

## 成果

鳴海絞り体験は、自分の作品を作ることで伝統工芸に触れるだけでなく、完成した作品を実際に自分たちで使ったり、感謝の品としてプレゼントしたりすることで、実用にも生かすことができた。身近な伝統工芸として、児童の身の回りに存在し、受け継がれようとしていると感じた。

## おわりに

地域の環境美化を目指す「環境学習」では、地域の人と一緒に清掃活動を行うことを通して、地域に愛着をもつとともに、地域環境を守ろうとする気持ちを高めることができた。

また、鳴海絞りと地域の歴史を学ぶ「地域遺産学習」では、鳴海絞り体験を通して、地域に受け継がれている

伝統工芸に触れ、伝えていくことの大切さを知ることができた。

これまでは、鳴海絞りを中心とした実践を行ってきたが、連携の在り方が変化し、同様の内容での継続が難しくなっている。今後は、鳴海絞りだけに頼らずに、本プロジェクトを続けていく方法について検討していきたい。



環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

# 江南市立宮田小学校



創 立：1908年

住 所：〒483-8389 江南市後飛保町両家125番地

連絡先：TEL 0587-58-7372 FAX 0587-58-7342

学級数：21 児童数：628人

H P：http://www.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310021

## 地域との関わりを柱としたESDの推進

### はじめに

本校の教育目標は、「地域の伝統特色を生かし、知・徳・体の調和のとれた心豊かでたくましい児童を育成する」ことである。従来から学校ボランティア等地域の協力を得て、総合的な学習の時間を展開してきた。平成26年度、ユネスコスクールの認定を受けたことを機に、従来の取組をESDの観点から見直し、改めて関連付けを行った。それ

をESDカレンダーの形で教育課程に編成し、指導に取り組んだ。目指すところは次の二点である。①自然体験を、環境問題を考えるきっかけとし、生涯にわたって環境について考える資質や能力を身に付ける。②地域の一員であるという自覚をもち、人と関わりながら働くことに喜びを見い出せるようにする。

### 実践内容①

## 「3年生 大根作り」

ねらい：地域の方々とともに大根を育て、食するという一連の活動の中で、協働の姿勢を養う。

活動は、一学期末から始まり、児童による草取り、職員の草取りと耕耘、ボランティアの方々による施肥・耕耘を行った。

2学期が始まると、青首大根の種の観察、JAの方から大根についてのお話を聞く会を行うなど、地域の特産品である大根への興味を高めた。その上で、ボランティアの方々の指導を受けながら9月上旬、大根の種まきを行った。

その後、児童は水やりを行ったり、ボランティアの方々の指導の下、間引きなど大根の世話をしたりする活動を行った。平行して大根の成長の様子を観察し、詳細に記録していった。また、大根について調べる活動にも取り組んだ。



大根の種まきの様子



11月に入り収穫期が近づくと、大根収穫祭に向けての準備に取りかかった。職員はボランティアの方々との打ち合わせを進め、児童は実行委員会を組織し、収穫祭のプログラム立案や感謝状の作成などに取り組んだ。

11月下旬、大根の収穫を行い、ボランティアの方々の指導の下、大根の塩漬け体験を行った。そして12月上旬、収穫祭を行った。ここでは大根の本漬けを見学したり、おでんパーティーを行って育てた大根をボランティアの方々とともに味わったりする活動を行った。会の終わりでは感謝状の贈呈と「ありがとうの花」の合唱を行い、地域の方々の支えに対する感謝の思いを表現して活動の締めくくりとした。

### 成果

作物を育て、消費するまでの一連の体験によって、地産地消など環境について考えを深めることができた。また、学校ボランティアなど地域の方々とともに活動する中で、地域と自分とのつながりを実感し、さまざまな人とのコミュニケーションをとる能力が着実に育ちつつあることが感じられた。

## 実践内容②

## 「5年生 米作り、餅つき、花餅作り」

## ねらい：稲の栽培・収穫や、地域の方々との餅つき等の活動を通し、地域との一体感を感じ取らせる。

5月の塩水選・種の観察から活動を開始した。種に同封のパフレットに、よい種の見分け方として塩水選が載っていたので、全員で取り組んだ。選別済みの種であったが、塩水選を行うことで、田植え前にも大切な作業があることを知り、よい米を収穫しようという、農家の人たちの気持ちに気付くことができた。

6月、自分のバケツ稲に使用する土を各自で混ぜて土作りを行った。植物の世話をしたり、肥料をまいたりした経験はあるが、土作りは初めてであった。この取組の中で、収穫に向けては予想外のさまざまな工程があり、それが収穫を左右することを児童は改めて実感できた。

田植えをした後の毎日の水やりでは、水が多すぎると種が腐ってしまうため、水量に気を付けて行うようにした。この後、稲実行委員会を中心に、毎日水やりを実施した。また、稲の成長に合わせて各自が観察記録を残した。互いの記録を見合うことで、自分では気付かなかった苗の変化を知り、学びを深めることができた。

夏休みには、自由研究「稲について」を行った。夏休み前から、各自で稲についてテーマを設定し、夏休み中にパソコンや本を使って調べ学習を行い、稲についての理解を更に深めていった。調査結果は2学期の総合的な学習の時間にまとめ、発表した。

11月上旬、自分の育てたバケツ稲の収穫を行った。稲を



花餅作り

かまで刈り、穂を取り、すり鉢と新品のソフトボールを使用して脱穀を行った。ほぼ全ての児童にとって初

めの経験であり、収穫の大変さを実感させる場となった。ここまでの一連の活動で体験した手間や苦労について画用紙にまとめ、バケツ稲作りを締めくくった。半年に及ぶ活動を振り返りながら、児童は作物を育て収穫することの大変さや労働の意義を改めて感じ取っていた。

12月中旬、全児童が杵を持ち、ボランティアの方々から支援を受けながら餅つき体験を行い、つきたてのお餅を全員でおいしくいただいた。児童はボランティアの方々からのお餅をいただくことの大変さを肌で感じ取っていた。その後、ボランティアの方々からのお餅をいただくことの大変さを肌で感じ取っていた。その後、ボランティアの方々からのお餅をいただくことの大変さを肌で感じ取っていた。



餅つき

## 成果

餅つきや花餅作りなどの活動に地域の方々とともに取り組む中で、自分も地域の一員であるという自覚が高まるとともに、人と関わりながら働くことの喜びを見いだすことができた。更には、地域で継承されてきた伝統的な風習にふれることで、地域への愛着を、より深めることができた。

## おわりに

これまでに紹介した活動の他にも、本校では学校ボランティアをはじめとする地域の力を得ながら「環境」をテーマとしたESDを推進してきた。今後も、こうした活動を一層充実させ、環境問題に関心をもち、環境に対する人間の責任と役割を理解し、持続可能な発展をする社会の担い手を育てたいと考えている。そのための課題とし

ては、次のようなことが考えられる。①新学習指導要領への移行を踏まえ、活動の見直しと各活動の教科横断的な関連付けを行うこと。②学校と地域とのコミュニケーションを密にし、育てたい児童の姿を地域と学校が共有すること。それを通じて、ESDカレンダーを、「社会に開かれた教育課程」の一部とすること。



環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー その他

## 半田市立有脇小学校



創 立：1875年

住 所：〒475-0017 半田市有脇町6丁目37番地

連絡先：TEL 0569-28-0076 FAX 0569-29-1436

学級数：8 児童数：152人

H P：http://www.ariwaki-e.ed.jp/

## ふるさとを愛する心、日本を愛する心を育てる

## はじめに

本校は、平成26年度に、ユネスコスクール加盟校に認定され、本年度も、他と「つながる」諸活動を展開してきた。実践は、大きく2つの分野に分かれる。一つは地域を大切に思う心を育てる活動、もう一つは日本人としての誇りを育てる活動である。どちらの活動も、過去・現在・未来という時間を超えて、他と「つながる」ことを目指した。将来は、

ふるさとでの体験、日本文化の体験を糧に、堂々と世界に飛び出して行ってほしいと願っている。ふるさとや自国日本を大切に思う人間は、他国のことも尊重できると考えられる。そのために、小学校段階において、国際理解の第一歩として「ふるさと」と「日本」について理解を深める実践を以下のように行った。

## 実践内容①

## 「地域とつながる活動」

ねらい：地域の環境活動、農業活動、伝統行事に参加し、ふるさとのよさを知り、大切に思う心を育てる。

10年程前、農家の減少や高齢化などで、地域にあったため池は荒れた状態で放置されていた。そこで、本校では、平成19年度から、地域と連携して「ため池環境改善活動一かいどり大作戦」を実施している。年に一回、地域のため池4つを順に掃除し、今年度で11回目となる。この取組は、会場設営、児童の安全管理等、地域の関係団体から全面的な協力を得て行われる。毎年9月にため池の水を抜いて実施され、児童は地下足袋を履き水着姿で、どろんこになって魚を捕まえ、外来種を駆除する。今年度も、小学生・地域住民等、合計450名が参加し、地域全体を巻き込んで行われた。

また、5年生は、4月から11月まで、稲作体験活動を行っている。この取組も、地域の農業従事者団体が、全

面的に支援してくれる。学校近くに、本校専用の田を貸してくれ、粃まきから田植え・かかし立て・稲刈り・脱穀まで、全てを指導してくれる。特に、田植えと稲刈りのときは、20名を超える地域支援者が集まり、手取り足取りで児童に作業の仕方を教えてくれる。それに対して、児童は、1月に「稲作感謝の会」を開催し、感謝の気持ちを伝えている。

毎年、運動会で披露する地元の盆踊りも、地域舞踊会の人に指導してもらっている。さらに、今年度、区会から、夏祭りでも小学生に、その盆踊りを披露してほしいと依頼があった。区会では子どもたちのお面や衣装を用意してくれ、児童は楽しく参加できた。今年度、児童は、敬老会の余興にも参加した。



「かいどり大作戦」一魚はどこだ

## 成 果

活動後の児童の作文・レポート等には、地域の方に教えてもらったことに対する発見や驚きが書かれている。地域の人への感謝の気持ちも書かれている。以上のように、さまざまな場面でさまざまな立場・年代の人とつながることにより、児童には、ふるさとを大切に思う心が育っていると考えられる。



## 実践内容②

## 「伝統文化でつながる活動」

**ねらい：日本の伝統的な文化等を体験し、祖国への理解を深め、日本を愛し、誇りに思う心を育てる。**

児童にとって、世界で最も短い詩「俳句」は、その短さから比較的挑戦しやすいジャンルだと考えられる。海外でも、俳句愛好者は多いと聞く。そこで、5年程前から、児童に、日本伝統文化の一つである俳句作りに挑戦する機会をつくっている。俳句のリズムは、児童にとって想像以上に親しみやすいものであり、作句に抵抗感は少ない。俳句作りは最初高学年から出発したが、今では全学年が活動している。児童は、行事や季節の変わり目に、日常的に俳句を作っている。その俳句は短冊に清書して校内に掲示し、学校だよりも掲載している。特に、運動会と卒業式の際には、全児童が俳句を作る。運動会は、本校を会場に、地域と合同で行われるので、来場者全体に作句を依頼している。本年度は、運動会后2週間程で、地域から100句を超える応募があり、児童の作品とともに、校内掲示をし、学校だよりも発表した。卒業式には、児童の「卒業俳句」と「送る俳句」が会場を飾り、来賓等から賞賛の言葉をいただいている。

また、本校6年生は、毎年総合的な学習の時間に、地域の茶道の先生を招いて茶道体験をし、その活動が好評を博していた。そこで、5年程前から、日本伝統文化の一つである茶道を全学年の児童が気軽に体験できるようにした。業間の大放課と昼放課に校長室を開放し、児童の誰もが抹茶を味わえる場所にした。このお茶会では、高学年が低学年に道具の使い方や簡単な作法を教え、自然に和や



相撲体験—お相撲さんて大きいね

かな雰囲気が生まれている。地域の人も、ホームページや学校だよりも、子どもたちが抹茶

に親しんでいることを知り、お茶を寄付して下さることもあった。本校では、お抹茶を点てるという文化が特別なことではなくて、日常的なものになっている。

もう一つの実践として、昨年度から、国技といわれている相撲の体験を実施している。運動分野においても、日本の伝統的なものを体験する機会をつくりたいと考え、実際に力士と対戦ができるようにした。地域に相撲関係者がいるので、その人に仲介を依頼し、毎年力士3名が来校してくれる。当日は、体育館に全校児童が集まり、力士から相撲の基本動作や練習方法を教えてもらい、希望者は全員力士と対戦できた。体育館に簡易土俵を作り、男女共に希望者全員が、単独で又は複数で力士にぶつかっていった。児童は、実際に力士と対戦したことが心に残ったようで、非常に喜んでた。この取組について、事前にホームページで呼びかけたところ、当日多くの地域住民が来校し、児童に熱い声援を送ってくれた。全校集会の後には、各教室で、児童と力士と一緒に給食を食べ、触れ合いを楽しんだ。



俳句作り—あなたの作品・私の作品

## 成果

児童の会話や感想コメントからは、どの体験に対しても興味津々の様子が見てとれる。日本の伝統的な文化や競技に触れることによって、日本独自のものに興味・関心を示すきっかけになったと考えられる。今後は、この気持ちが、他国の文化へ、世界全体へと向かっていくことを期待している。

## おわりに

ユネスコスクールの活動を通して、児童には、ぜひグローバル人材としての資質を身に付けてほしいと思っている。だからこそ、本校では、まず自分の足元を固める活動をしようと考え、「地域」と「日本」に照準を当て、各活動を展開してきた。これらの活動が、今後の児童の人生において、地球全体のこと、世界の平和を考えることに

つながっていくと信じている。ユネスコスクールの交流会や研修会に出席すると、多くの学校が身近なことを糸口にして活動していることを知る。ただ、本校では、これらの学校と情報交換をしながら活動を進めているという状況にない。今後は、身近なユネスコスクールと交流しつつ活動を広げていきたいと考えている。

環境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防災

エネルギー その他

# 東浦町立藤江小学校



創立：1873年

住所：〒470-2105 知多郡東浦町大字藤江字仏131

連絡先：TEL 0562-83-3274 FAX 0562-83-6800

学級数：15 児童数：404人

H P : <http://www10.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310251>

## 自ら課題を見つけ 探究する児童の育成

### はじめに

本校は知多半島東部に位置し、緑豊かで自然に恵まれた環境にある。学校の周りには竹林が広がり、たけのこ掘りをしたり、地域の方の協力を得て竹炭を作ったりしている。近くには須賀川が流れ、学校周辺は鳥獣保護区に指定されている。2009年に野生生物保護モデル校に指定され、野鳥観察にも力を入れて取り組んでいる。2014年

にはユネスコスクールに加盟し、本年度で4年目となる。

これまで、学校周辺の特色を生かした学習活動を生活科や総合的な学習の時間に取り入れ、ESDの視点で見直してきた。それにより、持続可能な社会につながる問題を自らの課題として捉え、解決しようとする態度や能力を身に付けさせたいと考え、実践を進めている。

### 実践内容①

## 「3年 竹ってすごい！」

ねらい：竹や竹炭に関する体験活動を通して地域の自然のよさに気づき、竹炭を生活に生かそうとする。



本校には、東浦町夢プラン推進事業で2004年に校内に設置された竹炭小屋と竹炭窯がある。これを活用し、地域の高齢者による藤江竹炭同好会の協力を得て竹炭を作り、学習に生かしている。

4月、学校周辺の竹林でたけのこ掘りを行った。子どもたちは竹炭同好会の方を「師匠」と呼び、掘り方を教えてもらった。その後、師匠から竹炭についてのお話を聞き、竹炭作りの準備として、竹割りと節取りの体験をした。そしていよいよ竹炭焼き。窯への火入れまでは子どもが行い、その後の温度管理などは師匠たちにお任せした。

6月のふれあい学級では親子で竹のお椀を作った。そして、そのお椀と師匠たちが作ってくれた装置を使って、流しそうめんを楽しんだ。

竹炭には、においを消したり水をきれいにしたりする力がある。それを確かめるために「水道水に竹炭を入れるとおいしくなるか」「竹炭を入れてご飯を炊くとおいしくなるか」「花びんの水に竹炭を入れると花が長持ちするか」といった実験を行った。子どもたちは、体験を通して竹炭の力を実感することができた。

11月の学校祭「藤江っ子まつり」では、竹炭を販売しよう計画した。竹炭を適当な長さに切って袋に入れ、効能をポスターに描いて掲示し、保護者や地域の方に販売して、竹炭のよさを伝えることができた。

この他にも全校活動として、毎年敬老会や地域の独居老人への竹炭プレゼントを行い、大変喜ばれている。



道具を使い、2人1組で竹を割る

### 成果

たけのこ掘り、竹のお椀作り、竹割りといった体験を通して、子どもたちは竹や竹炭を身近に感じ、自分事として竹炭を使った実験に取り組んだ。その結果、竹炭のもつさまざまな力を知り、環境にも優しいことに気付いた。そして、竹炭販売を通して学習したことを地域に広めることができた。



## 実践内容②

「5年 野鳥などを通して  
地域の環境について考えよう」

ねらい：野鳥、オニバス、環境学習プログラムを通して、  
環境について考え地域の自然を守ろうとする。

本校周辺は鳥獣保護区に指定されており、多くの野鳥を見ることができる。これを生かし、自然観察指導員の方の指導の下、学校周辺で野鳥観察会を年5回行った。

町内の於大公園では、絶滅危惧種である日本産オニバスの保護活動をしている。公園主催の「オニバス観察会」に参加し、環境の悪化が野生生物に影響を与えることを実感した。

企業の協力を得て、アイシン環境学習プログラム「森の仕組みを知ろう」に取り組んだ。自然環境について学び、

「エコアクション」  
として各自で環  
境を守る活動を行った。

ここまでの学習をまとめ、「守ろう！地球の未来～わたしたちにできること」をテーマに、「藤江っ子まつり」で発表した。

最後に、1年間の環境学習を振り返り地域の自然や自分のエコ活動について話し合った。それを基に「わたしのエコ宣言」を考え、表明した。



双眼鏡を使って野鳥を観察する

## 成果

地域の野生生物について広く観察する機会をもち、理解を深めた。また、自分にできるエコ活動を実践し、環境のために行動しているという意識をもった。さらに、エコ宣言によって活動が家庭や地域で、また将来にわたって継続されることが期待できる。

## 実践内容③

## 「6年 世界の中のわたし」

ねらい：世界と日本とのつながりや世界が抱える問題について学び、解決方法や自分の生き方を考える。

単元の導入では、ゲストティーチャーから外国生活の話を聞き、「野外民族博物館リトルワールド」を見学して、外国に対する興味を高めた。

次に、世界の問題を分かりやすく説明した資料「世界がもし100人の村だったら」やJICA資料「学校に行けない世界の子どもたち」を使い、シミュレーションを取り入れた活動をすることによって、もっと調べたいことを考え、課題を設定し追究した。

さらに、「ア  
ートマイル国際交  
流壁画共同制作

プロジェクト」に参加し、フランスのコレージュサンポールレゼ小学校と交流した。英語による自己紹介ポスターを作成し、インターネットで相手校と交換して、壁画の共通テーマを「私たちの文化遺産を守ろう」と決めた。そして、半分ずつ絵を描いて壁画を完成させ、鑑賞し合った。



アートマイルプロジェクトの壁画制作

## 成果

始めは好きな国や行きたい国に留まっていた子どもたちの関心は、JICA等の資料で心を揺さぶられ、厳しい現実にも目を向け意欲的に課題を追究した。そして、自分たちにできる国際交流に取り組んで、多様な文化に気付き、尊重する気持ちが生まれた。

## おわりに

学習環境に恵まれ、ともすれば体験だけに終わりがちだった生活科や総合的な学習の時間は、ESDの視点で見直すことによってより探究的な学習に改善されてきた。自分事として課題を追究する姿も多く見られるようになってきた。各学年の実践の他にもESDを支える全学年の学習活動として、「伝え合いタイム」（話し手の発表に質問や

感想をつなぎ、自分の思いを伝え合う。）を行っている。また、「ペア活動」（異学年でペアを組み、読書、遊び、スポーツなどで交流する。）にも取り組んでいる。授業時間だけでなく学校生活全体でESDを意識して取り組むことによって、ホールスクールアプローチを進めていきたいと考えている。



環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

## 西尾市立西尾小学校

西  
尾

創 立：1894年（からの記録がある。詳細不明）

住 所：〒445-0864 西尾市錦城町162番地1

連絡先：TEL 0563-56-2266 FAX 0563-56-2267

学級数：24 児童数：724人

H P：http://www.nishio.ed.jp/nishio-sho/index.html

## ふるさとを愛し、思いを伝えられる子の育成

## はじめに

2020年を機に、グローバル化は一気に加速しようとしている。また、積年の課題である人間関係の希薄化解消のためか道徳が教科化され、注目が集まっている。このような状況の中、教育の不易は「ふるさとを愛する子ども」そして「人・もの・こととの関わりの中で自らを成長させる子ども」の育成であると考え。本校が長年にわたり取り

組んできた「町学習（通称：町学）」は、これらの子どもの育成を目指す上で中心的な役割を担ってきた。グローバルな視野をもつための礎となるローカルな視野は、地域との密接なつながりを基にした学びから生まれる。私たちは、6年間をかけて、地域を学び、地域で学び、地域に愛着をもてる子どもを育てたいと願う。

## 実践内容①

## 「400年の西尾祇園祭の歴史を受け継ぐ子ども」

ねらい：地域文化の象徴である西尾城下の祭りの伝統にふれ、学び、次世代へ継ぐ気持ちを育む。

脈々と流れる西尾城下祇園祭の伝統は、現在学校もその継承の一翼を積極的に担うようになった。本校では、5年生の町学の追究対象をこの祇園祭としている。その中でも手踊りは、3日間にわたる祭りのオープニングを飾り、毎年多くの児童が参加する。

単元の始まりは、「楽しむ側」としてこれまで参加してきた祇園祭の振り返りであった。子どもは、屋台で食べ物を買ったり、大名行列や御輿を眺めたりしてきた。高学年となった5年生では、楽しむ側と同時に楽しませる側として参加できるよう、授業を展開した。

子どもの「楽しませる側としても祭りを盛り上げたい」という気持ちが喚起されたところで、具体的な活動について話し合った。例年のことではあるが、手踊り・大名行列・



お囃子・御輿への参加、団扇の作成・配布が提案された。その中でも参加者が多く集まったのが、手踊りであった。本年度も子どもによる積極的な呼びかけが行われ、高学年の中から70名程の参加者があった。

長年手踊りの講師を務めておられる町の先生に、踊り方を学んだり思いを聞いたりして、子どもは祭りに臨む気持ちを高めた。その結果、本番では、力いっぱい踊る姿が見られた。

祭りの後も、活動を振り返り、受け継ぐ者としていかに伝統を守るか、またどう次へつなげていくかを話し合った。子どもは、現在も、地元の公民館で行われるフェスティバルで祇園祭について説明したり、新たに作成した団扇を配ったりしようと、準備にいそしんでいる。



ぼくたちの手で祭りを盛り上げよう！

## 成 果

培われた祇園祭への思いは、現在も醸成されている。最高学年となる来年は、下学年に手本を示すリーダーとして、更なる活躍を見せるだろう。本年度6年生が祇園祭を受け継ぎ広めたい思いをまとめ、新聞に投稿した。この思いこそ、未来へと引き継がれる、本校の伝統と言える。

## 実践内容②

「ビオトープから  
ふるさとの自然の大切さを学ぶ子ども」

ねらい：ふるさとの川の環境保全に努め、  
校内にあるビオトープで自然を愛する気持ちを育む。

4年生の町学は、地域の自然環境が追究対象となる。本校は、西に二の沢川、東にみどり川が流れ、校内には旧西尾城のお堀を利用したビオトープがある。そこにはメダカやフナがすみ、カワセミが飛来する。入学以来こうした自然に親しんできた子どもに、環境を見つめ直すところから単元は始まった。

汚染やゴミなどの問題に目が向いたところで、地元で環境保護に取り組んでいる方や、企業で環境教育に取り組んでいる方を招聘した。現況を把握し、生き物が生活しや

すい環境をつくるために、自分たちにできることは何か考えられるようにするためである。

子どもは、川に看板を設置したり、近くの公民館に環境保護を訴えるブースを出したりした。そして、校内のビオトープ整備に積極的に取り組むようになった。多くの方々の出会いから、まず自分にできることを見つけ出し、実践に移す姿があった。



大きな魚を見つけたよ！

## 成果

市街地にありながら、自然に恵まれた本校の特徴を生かした環境学習は、ふるさとの自然を愛する気持ちを育む。ここで学んだことは、二の沢川やみどり川のクリーン作戦や、ビオトープ整備へのボランティア参加へとつながっている。

## 実践内容③

## 「地元を担う次世代としての防災意識を育む子ども」

ねらい：災害発生時に地域で果たすべき役割について学び、  
主体的に実践しようとする気持ちを育む。

本校が17年にわたり取り組んできた防災教育。これまで、市の訓練と併せて実施してきたが、本年度からは、6年生の防災会議を最終目標として学習過程を再編した。

単元の始まりは、これまでの取組の振り返りと見直しである。まず、地元の中学生の取組を紹介した。中学生はこれまで、避難所運営の一助を担うなど、本校防災訓練の補助役としてボランティア参加をしてきた。「万が一の災害の際、地域のために何ができるのか」6年生は自らに

問い直した。

家族や町内会長さんからの聞き取りなどを基に、6年生防災会議を開き意見を

出した。そして方向性が見えてきたところで、大学教授による評価を得た。これまで気付かなかった視点を指摘されたり、意識のもち方を学んだりした子どもは、災害に対する考え方を再構築することができた。



私たちの町は私たちが守る！

## 成果

1～5年生は本年度から段階的な学習が始まったところである。しかしながら、地域の一員として活躍すべく、AED・トリアージ講習や炊き出し訓練などに参加し、主体となって活動する術を学んでいる。今後、更なる防災意識の向上を図っていきたい。

## おわりに

「僕は、大人になっても、祇園祭を盛り上げる活動をしていきたい。手踊りや大名行列でお世話になった町の人は、伝統を守ろうと、僕たちに優しく、根気強く教えてくださった。西尾の伝統は、そんな町の先生たちのおかげで成り立っている。次は僕たちの番だ。」子どもの振り返りにあるこの文章から、次代を担う小学生の確かな気持ちが

伝わってくる。

ユネスコスクールのESDの活動及び精神は、本校がこれまで大事にしてきた町学そのものであり、今後も決して欠くことのできない伝統である。更なる発展を期し、今後も子どもの成長を支えていきたい。



環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

# 豊橋市立東田小学校



創 立：1874年

住 所：〒440-0065 豊橋市仁連木町15番地

連絡先：TEL 0532-62-0448 FAX 0532-65-1204

学級数：19 児童数：470人

H P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/azumada-e/

## 「ふるさと東田」を愛する子どもたちに

### はじめに

本校区には、水生生物が豊富に生息する朝倉川が流れている。また、戦後から続く朝市が開かれ、人と人との関わりの中で、新鮮な野菜や食材が売り買いされている。その他にも、古墳や城跡、寺社仏閣などがあり、子どもたちの生活に密着した教材にあふれている。これらを日々の学習の中に適切に位置付けることで、地域の“ひと・

もの・こと”と深く関わり合い、「ふるさと東田」を愛する豊かな心を育みたいと考えている。

そのために、これまでの教育活動を見直し、生活科・総合的な学習の時間を中心に学習を継続的に展開し、自分が住む地域のよさに気付き、将来にわたって地域への誇りと愛着をもてる子どもたちを育てていきたい。

### 実践内容①

## 「自然・環境を考える活動 —朝倉川探検—」

ねらい：自然のすばらしさや環境を守る人々の活動にふれ、朝倉川と自分の生活との関わりに気付かせる。

校区を流れる朝倉川に関心を持ち、その現状について調査を行う。調査に当たっては、NPO朝倉川育水フォーラムの方から水質調査の方法や指標生物による水質調査の仕方について学んだことで、調査に積極的に取り組むことができた。この調査から、子どもたちは「きれいに見えても、川はやっぱり汚れているんだな」ということが分かり、さらに詳しく朝倉川を調査することにした。

総合的な学習の時間で里山について学習したことで、里山近くにある朝倉川上流に関心が高まった。「上流と中流では水のきれいさはどう違うのか」「サワガニが見つかったらいいけど」などの思いを抱いて上流調査を行った。

上流に向かう中で、捨てられた自転車が落ちているのを見て、「上流は汚れているかも」と心配する様子も見ら

れた。しかし、途中でカワセミを見つけられたことから、「水はきれいかもしれない」と期待が高まった。

上流の調査では、NPO朝倉川育水フォーラムの方と調査を行った。活動の振り返りでは、「サワガニがいた！上流はきれいなんだね」という意見と同時に「ごみが落ちていたから、環境を守るために、ごみは拾わないといけない」という意見が出された。

その後、調査したことや自分たちの考えを新聞にまとめたり学習発表会で他学年の児童や保護者にも朝倉川の現状を報告したりした。朝倉川を自分たちの手で保護しようという意識から、ポスターを作って掲示し、NPO朝倉川育水フォーラムの主催する朝倉川530（ゴミゼロ）大会にも近隣の高校生や地域の方々と一緒に活動に参加した。



朝倉川の源流調査

### 成 果

さまざまな調査活動を行ったことで、子どもたちは、自然にあふれた朝倉川をよりよい環境にしていくための取組を考えたり、これまで自分たちの調べたことを学習発表会で発表したり新聞にしたりして、他の学年の児童や保護者・地域の人たちにも朝倉川を守っていくことの大切さを啓発することができた。



## 実践内容②

## 「地域の歴史にふれる活動 — 戦国武将戸田氏と二連木城 —」

**ねらい：地域の城址や寺院に関わる人々の思いや決断が現代にまで受け継がれていることを実感する。**

戦国武将の生きる姿をより豊かにイメージし、その思いに迫るためには、現代とは異なる戦国時代の価値観について理解する必要があると感じた。そこで、戦国時代の農民のくらしや特徴的な事柄を調べることによって、当時の人々の価値観を理解することにした。

授業では、戦で戦う人のほとんどが農民だったという事実から、「もし農民の立場ならより強い大名が治める土地に住みたい。」という意見に焦点をあてた。子どもたちは、戦国武将が必死で戦う理由は、領地や勢力の拡大だけでなく、そこに住む人々の生活を守るためでもあったという気づき生まれた。

戦国武将にさらに興味をもった子どもたちに、校区に残る「二連木城址」の写真を提示した。戦国時代に戸田宗光により建てられた二連木城は、現在「大口公園」になっており、子どもたちになじみの深い場所になっている。子どもたちは、戸田氏がどんな一族であったのかを調べたいと考えた。

子どもたちは、二連木城や今橋城（吉田城）をめぐる東三河の戦国武将の勢力の変化を年表と勢力図を作成することで、理解していった。そして、戸田氏をはじめとした戦国武将のおかれた立場を正しく理解し、その思いに迫ることができた。

その中でも、子どもたちが着目したのは、1547年の「竹千代強奪事件」であった。本家である田原戸田氏の滅亡の原因となったこの事件を取り上げ、話し合いを行った。



二連木城址の見学



戸田氏の菩提寺全久院の見学

田原戸田氏は、松平氏から今川氏に人質として送られる竹千代（後の家康）を強奪し、織田氏に送ろうと画策した。子どもたちは、「今川を裏切らなければ、戸田氏は滅びなかったのに。」「なぜ、竹千代を織田に渡したんだ。」と、田原戸田氏の行動に疑問をもった。そこで、竹千代強奪事件直前の東三河の情勢を勢力図に表して整理し、「田原戸田の家臣」という立場から、作戦に従うかどうかを判断することで、決断の重大さに迫ることにした。

授業では、「戸田氏が生き延びるためには、何を理由にして決断すべきか」ということが話題になった。話し合いでは、今川氏への恨みを理由にして、これ以上今川氏の味方につくのはおかしいという考えをもつ子がいた。同じ立場の児童は、織田氏、今川氏、松平氏の石高の差という異なった観点で自分の考えを述べた。それに対して、織田氏のおかれた状況を説明して、織田氏についても、その先は分からないという考えを述べる子もいた。

話し合いを行う中で、子どもたちの真剣に考える表情が多く見られた。「きっと当時の人たちも、君たちのように真剣に、いろいろなことを考えて、この作戦を実行するという決断をしたんだね。」そう伝えて話し合い活動を終えた。

## 成果

群雄割拠の三河の地で、生きるか死ぬかの究極の選択を繰り返しながらも、戦国大名として生き残ろうとした戸田氏の生き様にふれることで、子どもたちは、現代と異なる価値観の時代であっても、よりよく生きたいと願う人々の思いは変わらないことに気付いた。

## おわりに

地域素材を活用し、他教科を横断的に取り入れた生活科や総合的な学習の時間の単元を構成し、地域やNPO団体の方に学習に参加してもらうことで、自然環境や歴史と自分との関わりについて、実感を伴って考えさせることができた。全久院の見学では、境内の戸田氏の墓石に刻まれた字を見つめ、「校区の文化遺産を語り伝えたい。」という

子がおり、地域に残る文化財への思いが読み取れた。

こうした学びを自分の生き方や現代社会の問題と結び付けて考えるられるようにするためには、教科の枠を超え、地域全体を振り返る中で、子どもたちに「地域から学ぶこと」と「地域から学んだことをどう生かすか」を考えさせる必要があるのではないかとと思う。

環 境	国際理解
地域文化	気候変動
生物多様性	防 災
エネルギー	そ の 他

## 新城市立作手小学校



創 立：2013年  
住 所：〒441-1423 新城市作手高里字繩手上32番地  
連絡先：TEL 0536-38-1555 FAX 0536-38-1566  
学級数：8 児童数：79人  
H P：http://www.city.shinshiro.ed.jp/tsukude-el/

## つくで大好き！ふるさとから学び続ける子の育成

### はじめに

本校は、学区が広く児童の7割程がスクールバスで通学している。2013年に作手地区に点在していた4校が2校舎に合併。2017年に新校舎が完成して1校となった。広い学区には自然・文化・人など多くの宝が存在する。ふるさと作手のよさをたっぷりと体感する活動や、ふるさと作手で活躍する人々との関わりを重視する活動を最大

限に教材に取り入れることで、教科書以上に深い学びができると考える。また、ふるさとの自然や文化、人を単元の中心にすることで、子どもの意欲関心が持続し、生涯にわたってふるさとを愛し続ける子どもを育ていけるであろうと実践を進めている。

### 実践内容①

## 「つくで大好き!!～すてきがいっぱい～」



ねらい：身近な人々との関わりを通して、ふるさと作手を愛する心を育む。

小学校の近くには、高齢者福祉センター、こども園、中学校、高校が、徒歩で行ける距離にある。これらの施設の幅広い年齢の人々と交流することで、ふるさと作手には素敵な人々がいることに気付くであろう。1、2年生は、人々との交流を通して、すてきな物（特産物）にも気付き、ふるさとが大好きな子になってほしいと実践を進めた。新校舎は、平屋作りで、特別支援学級、1年生、2年生の教室が隣り合っている。このため、特別支援学級の6年生1名、5年生2名とは、普段から仲よく遊んでいる。そこで、特別支援学級児童がリーダーとなる活動を計画すれば、彼らの自信につながるであろうと考えた。

1学期は、いちごでジャム作り、高校生との藍染体験を実践した。染色をする前に、ゴムや洗濯バサミを使って

ハンカチへの模様づけを特別支援学級の児童が1、2年生に教えながら準備した。2学期は、高齢者生活福祉センター訪問、こども園訪問、高校生とのクリスマスリース作りを行った。福祉センター訪問は、支援学級3名をリーダーとして、3つの班に分かれ計画、練習を行った。支援学級児童の個人目標には、「夏の交流会で体験したゲームからヒントを得て、ゲームの案をだす」「3、4年生で訪問したときのことを思い出して発言する」など、今までの経験を生かした目標が設定された。1、2年生は、支援学級児童と相談しながら、ゲームの内容を幅広く考えた。センターへの訪問では、それぞれの学年のよさが発揮できたものとなった。



高校生と一緒にクリスマスリース作り

### 成 果

「計算を6年生のAちゃんがやってくれて、たすかったよ」（2年生）「高校生のお姉さんが優しくかったよ」（特別支援学級6年）と教室内では感じることはできない、人々とのふれ合いが感想に記された。異学年交流を含めた幅広い交流は、相手を敬う気持ちや、思いやる気持ちを育てることにつながると実感した。



## 実践内容②

「ふるさと作手の発展に  
尽力した人の思いにふれて」

ねらい：作手の特産物を知り、育てる活動を通して、  
自分も地域のためにできることを考える。

本校4年生は、社会科と総合的な学習の時間でふるさと作手の自然を学ぶ活動を多く取り入れている。作手の特産物（自然薯・トマト・ブルーベリー・いちごなど）作手の自然（川・湿原など）などである。なかでも、地元農林業公社の方の協力で「自然薯」を育てる活動は合併以前から続いている。作手に住む児童でも「自然薯」を育てる経験は少ない。5月に、種芋を植え、12月に収穫。まっすぐに育てる工夫や植え方に興味関心を示し、自分の身長

ぐらいに成長した自然薯に驚いていた。

また、地元の方と鮎の放流、鮎のつかみ取り、ホテルの観察、水生生物調査なども行っている。作手の豊かな自然を大切にしながら、特産物を発展させようとする地域住民の気持ちや考えを実際に聞くことができた。



「自然薯」の植え付け

## 成果

どの活動も楽しく、子どもたちは積極的に取り組んだ。地元の方と活動することで、素晴らしい技術を学ぶことができた。また、ふるさとを大切に、さらに発展させていきたいと考えていることも知り、自分たちに何ができるか考える姿がみられるようになった。

## 実践内容③

「ふるさとを愛する子ども  
～おいしい牛乳は作手から～」

ねらい：乳牛の飼育が盛んな作手の環境のよさや乳牛の  
魅力を感じ、それを多くの人々に伝えようとする。

5年生は、社会科や家庭科と総合的な学習の時間を関連させ、米（ミネアサヒ）作り、炭作り、紅茶作り、牛乳について、地元の生産農家の方の協力を得ながら学ぶ活動を行っている。本年度は、毎日給食で飲む牛乳をきっかけに、乳牛を育てている牧場調べを計画した。始めに、牛乳調べ。牛乳パックを集めたり、飲み比べを行ったりした。そして、地元の牧場の見学や搾乳体験を行った。地元の牧場では牛乳は作らないことを知り、製乳工場へも見学

に出かけた。牧場は生乳を作る、製乳工場

は牛乳を作るという視点で学びが深まった。また、作手地区の酪農が盛んな理由を考えた。畜産業が抱える問題（後継者不足・人手不足など）と関連付けながら学び続けている。11月には、この活動で学んだことを劇「ミルク戦隊ギューレンジャー」と題し、学習発表会で披露した。



乳牛への乳やり体験

## 成果

「私は将来、動物関係の仕事につきたいので、今回はとても楽しかったです」「牛乳は、牛が大きくなるまで育ててくれた森さんのおかげなので、もっと飲みたいです」と感想に記された。乳牛を学ぶことで知識も深くなり、自分の生活をよりよくしようと考える児童が増えた。

## おわりに

広い作手地区に生まれ育つ児童は、地域の宝物である。また、児童にとってもこのふるさと作手の自然、文化、人は大きな宝物である。それらを知り、ふれ合い、学ぶ全ての活動に、児童は積極的に参加し、生き生きと学び続ける姿を示してくれた。それは、ふるさと作手に大きな魅力を感じ、関わる人々の大きな愛情を感じるからであろう。

だから、児童には、ふるさとを大切に思う心が必ず育っていると考える。ふるさと作手を大きな教室として、教育課程を編成することは、持続発展可能な社会の確かな担い手を育てるのに非常に有効であると確信する。今後も地域の協力を得ながらESDの視点にたった教育活動を展開していきたい。



環 境

国際理解

地域文化

気候変動

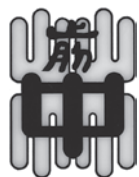
生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

## 豊田市立前林中学校



創 立：1981年

住 所：〒473-0934 豊田市前林町行田60番地

連絡先：TEL 0565-52-1353 FAX 0565-52-6967

学級数：24 生徒数：708人

H P：http://www2.toyota.ed.jp/swas/index.php?id=c\_maebayashi

## 地域と生徒、地域と学校を結ぶMプロジェクト

### はじめに

生徒の主体性を育てるために、総合的な学習の時間の効果的授業実践について研究を進めている。本校では、自分たちで課題を設定して解決に向けて追究する活動をMプロジェクトと名付けて行っている。年間カリキュラムの中に、「課題設定→追究計画の立案→追究活動→まとめ→情報の発信」といった生徒の主体的な動きを促すプロ

セスを設定している。この活動ではESDの視点に立って授業の改善を行っている。

また、生徒の地域社会の役に立つために進んで行動したいという思いを育て、地域の施設や人材の活用、地域の方々との交流、地域貢献活動等を設定し、地域社会に主体的に生きる前中生の育成を目指している。

### 実践内容①

### 「地域と関わる～あしたをつかめ～」

ねらい：地元愛知県で盛んな産業について調べ、働くことへの興味関心を高める。

1年生は、職業観を養うために、地元愛知県にはどのような産業があるのかを調べた。まず、ものづくりを実体験するために、瀬戸の産業である陶芸体験を行った。実際にものづくりをする体験を通して、自分の思いをモノにしていく楽しさや難しさを感じることができた。陶芸体験によって、ものづくりに対する意識が高まった後に、愛知県にはどのような産業があるのか、個人課題を設定し、調べ、産業新聞にまとめていくことを行った。そして、お互いに産業新聞を発表し合う中で、愛知県にはさまざまな分野の産業があることに気付くことができた。産業調べで、ものづくりに関わる職業について関心を高められた。そこで、職業について考えていくことにした。自分の将来の夢を実現していくためには、どのような職業が合っているのかを



考えるために、友達と意見交流を行ったり、進路適性検査を実施したりした。また、学校区をはじめ、豊田市のさまざまな職場で働く方をお招きし、働くことのやりがいや苦労などを直に学ぶ機会を設けた。

その後、職業について関心が高まったところで、生徒一人一人で調べたい職業を設定し、職業調べを行い、パンフレットにまとめていった。職業調べでは、地域の図書館から借りてきた文献資料、インターネットを使用して情報を集めた。そして、パンフレットの形でまとめ、発表会を実施した。さまざまな職業についての発表を聞く中で、生徒たちは働くことに対する前向きな気持ちを高めていくことができた。



働く方に学ぶ会

### 成果

生徒は、地元の産業などを調べ、お互いに産業新聞を発表し合う中で、この地域にはさまざまな分野の産業があることに気付くことができた。働き方に学ぶ会では、自分の関心のある分野の講師を選択して話を聞くことができたため、働くことへの関心をより一層高めた生徒が多かった。

## 実践内容②

「後輩のために、  
私たちにできることは何だろう」

ねらい：積極的に人のために何ができるかを考え  
行動する姿勢を育てる。

2年生では堤小学校6年生・駒場小学校6年生と連携した英語授業を行い、関わりをもっている。6年生が修学旅行を迎える2～3週間前をめぐりに交流の機会を設定する。6年生は、修学旅行の京都や奈良で出会う外国人にインタビューをするという課題をもって参加する。そのためにすでに英語の学習を進めている中学生を外国人役に見立て、インタビュー活動の練習を事前に行うというのが授業の内容である。小学校の先生が外国人との対話の

例を作成し、それを小中学生が

それぞれの学校で事前に練習を重ね、交流の日を迎える。交流時の生徒の様子としては、小学生と初めて顔を合わすこともあり、対話時に積極的に小学生に話しかけられなかった生徒やアイコンタクトが思うように取れなかった生徒が多かった。しかし、交流の回数を重ねると生徒は要領を得て、自信をもって活動するようになる。



英語でのインタビュー活動

## 成果

英語を通じて、人に伝えることの楽しさや達成感を得られる授業実践だった。小学生と単に関わるだけでなく、小学生が困っている点を見つけて教えたり、優しい口調でゆっくりといていねいに話したりする姿勢が見られるようになった。

## 実践内容③

「地域と結びつき、  
私たちにできることは何だろう」

ねらい：地域の防災を通して自分たちで地域のために  
できることを進んで考えていく姿勢を育てる。

3年生は、防災について考えるための学習や救急救命講習などの防災体験を行ってきた。これらの活動から生徒は、前林中学校が災害時に避難所となったときには自分たちには何ができるだろうかという課題をもった。そこで、避難場シミュレーションゲームを行った。この学習を通して、生徒は避難所でも自分たち中学生でも地域の人のために貢献できることを知った。実際に本校の給水ポンプの設置や非常用トイレの組み立てを行った。また、防災倉庫

の備蓄品の確認を行った。生徒

は備蓄品の量が考えていた以上に少ないことに驚いた。そこで、少しでも自分たちで備蓄品を増やすことはできないかと考え、地域の商店や企業の協力を得て、アルミ缶を回収し、備蓄品を購入することを考えた。商店や企業を一軒一軒生徒が回り協力を得て活動を行い、アルミブランケットを購入することができた。



避難所開設シミュレーション

## 成果

防災学習を通して、実際に学校が避難所となったときに、中学生でも避難してきた人のために活動することができることを知ることができた。避難所生活をより過ごしやすくしたいという課題をもち、地域に呼び掛けて防災用品の補充を行うことができた。

## おわりに

Mプロジェクトでは、身近な地域に目を向けることで生徒は意欲的に考え行動することができた。また、「課題設定→追究計画の立案→追究活動→まとめ→情報の発信」といった生徒の主体的な動きを促すプロセスを設定することで、活動の筋道が明確になった。

Mプロジェクトの活動をさらに発展させるには、生徒の主体性がより前面に出てくる交流活動を展開できるようにしていきたい。そのためには、交流の回数を増やす必要がある。年間行事と照らし合わせ、年度当初や前年度からの早期の計画を立てる必要がある。

環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

# 豊橋市立高豊中学校



創 立：1947年

住 所：〒441-3211 豊橋市伊古部町原24-1

連絡先：TEL 0532-21-2101 FAX 0532-44-5012

学級数：12 生徒数：347人

H P：http://www.takatoyo-j.toyohashi.ed.jp/takatoyo-j/index1.html

## 地域の方々とともに私たちが守り受け継ぐ表浜

### はじめに

高豊中学校は、豊橋市最南端の渥美半島付け根に位置する。太平洋に面する表浜海岸は片浜13里とも呼ばれ、渥美半島先端から浜名湖に至るまで砂浜が続く、国内でも有数の自然海岸になっている。この海岸にはアカウミガメが産卵のために上陸する。渥美半島はフィリピンプレート移動によって隆起してできた。半島の付け根近く

はまだ地層が柔らかく、隆起してできた丘陵の南半分が海蝕によって失われ、崖になっている。その崖に海岸林が発達し、丘陵には里山があった。多様性に富む貴重な生物をはぐくむこの自然を、私たちは地域の中で守り受け継いでいく。

### 実践内容①

## 「受け継ぐ伝統・表浜クリーン活動」

ねらい：アカウミガメが上陸産卵し、

多くのサーファーや釣り客にも愛される表浜海岸を美しく保つ。

今から32年前、生徒会役員の呼びかけで表浜クリーン活動は始まった。そのころはまだ、アカウミガメの産卵や子亀の帰海に車のわだちが悪影響を与えることさえも、十分に周知されていなかった。海岸には流れ着いたものだけでなく、投棄されたり、バーベキューのあと放棄されたりしたごみが目立っていた。この表浜を美しくして、ウミガメの保護だけでなく、表浜を活用する人たちの意識も高めたいとの願いから始まったクリーン活動である。2015年には30年間続いた活動を認められ、国土交通大臣表彰を受けた。

アカウミガメはクラゲを好んで食べる。海岸に投棄されたり流れ着いたりするポリ袋は、海に漂う姿がクラゲに

似ている。アカウミガメがこれを誤食することが、大きな問題であることが明らかになってきた。加えて、海洋投棄されたプラスチックが太陽光によって分解されたマイクロプラスチックが、環境に大変な悪影響を与えていることも最近クローズアップされている。

最近の活動では、特にこれらプラスチックゴミと、砂浜に特徴的にみられる希少な昆虫類のトラップとなる空き缶の回収に力点を置いて、クリーン活動が実施されている。今年度は台風通過後の活動となったために、例年より多くのごみが漂着しており、やりがいのある活動になった。今後も実施時期を検討しながら、より効果的な活動ができるように、この伝統ある行事を継承していきたい。



海岸でプラスチックごみを拾う

### 成 果

表浜海岸の重要性は豊橋市においても広く認識され、アカウミガメ保護対策協議会の設置や車の乗り入れ禁止など、行政も一体になって環境保全の取組がなされている。生徒たちは自然史博物館の学芸員による出前講座なども受けて、さらに活動を盛り上げ、引き継いでいく意欲を高めている。



## 実践内容②

## 「地域の方々とともに、残したいササユリ」

## ねらい：海岸の丘陵に自生するササユリの保存に立ち上がった地域の方々とともに、保全活動に取り組む。

本校のある伊古部の海岸は、現在は急に切れ落ちた崖になっている。この崖は、柔らかな地層でできた丘陵が海蝕されてできた。江戸時代以降の記録でも、海岸は2kmほども侵食されているという。現在は丘陵の頂上部が海岸崖の端になっている。

昭和30年代に起きたエネルギー革命以前は、この丘陵はクロマツを主体とした里山林であった。この地方では「ご掻き」と呼ばれた、松林の落ち葉や枯れ枝集めで優れた焚き付けが得られ、現金収入の一助にされていた。明るく風通しのよい里山には多くのササユリが咲き、花期には子どもたちが手折って町まで売りに行き小遣い稼ぎもできたという。

エネルギー革命以降、手入れされなくなった里山は常緑樹が侵入して、林床は暗くなり、いつしかササユリも消えていった。1996年、わずかに残っていたササユリが見出され、地域にササユリ保存会が立ち上がった。里山を間伐し、明るい林床を作り出してササユリを保全した。保存会ではこの場所の系統保存にこだわり、見つけた株から種子をとって個体を増やしている。

この地域は、ササユリの分布域のほぼ東限に当たり、これより東ではヤマユリに置き換わっていく。この地域のササユリを保存することは、生物多様性保全の上からも大変重要なことである。また、最初にこの地域にササユリが分布を広げたときには丘陵であった場所は、現在は海岸

の崖の上である。海岸に生育するササユリの集団というのも極めて稀な存在である。この土地の

地史を語る証人としても、この場所のササユリは大切だ。

本校の生徒会が保存会の活動にボランティアとして協力を始めて、今年（平成29年）で11年目を迎える。保存会のメンバーが高齢化していく中で、生徒やその保護者という、若い人の関心が高まり、力になっていくことが強く期待されている。

現在、中学生はササユリの花期に開催されるササユリ祭りの手伝いと、秋の圃場や里山でのササユリの植え付けや管理を、保存会の指導のもとで行っている。ササユリ祭りでは、来場者の案内や保存会の活動資金を得るための鉢花の販売などを行っている。豊橋鉄道の主催するウォーキングとのタイアップも進み、来場者は年々増加している。保存会の方は、ササユリの研究で知られる奈良県農業試験場や、豊橋技術科学大学の指導も受けて、保全活動の進め方を検討しながら取り組んでいる。20年に及ぶ活動を認められ、平成28年度には豊橋市から表彰も受けた。



鉢花の売上げが保存会の活動資金



ササユリ祭り来場者への湯茶の接待

## 成果

生徒たちは、伊古部のササユリの価値を学習し、さらに保全活動への意欲を高めている。毎回、120名を超える生徒がササユリ祭りのボランティアに参加する。PTAやそのOBからなる黒潮支援隊の方にも啓蒙活動が行われている。さらに地域での関心を高め、この貴重な自然を守り続けたい。

## おわりに

私たちの校区は大変恵まれた自然環境の中にある。本校は長くその保全活動に関わってきた。けれども、長い年月のうちに活動の主旨があいまいになり、ただ活動をしているだけになってしまう傾向があった。ユネスコスクールとして活動を見直すことで、活動の意義や校区の自然の大切さを再認識し、生徒のみならずPTAやそのOB組織にも

啓蒙が進められている。豊橋自然史博物館の学芸員や、自然観察指導員連絡協議会、県や市の自然環境課などから指導を受ける機会も得られ、生徒たちの地域の自然に向けられる意識は明らかに高まってきている。このことが、自分たちの地域に誇りを持ち、関心をもち続ける生徒の育成につながることを願う。

環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー その他

# 名古屋国際中学校



創 立：2003年

住 所：〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町1-16

連絡先：TEL 052-858-2200 FAX 052-853-5155

学級数：7 生徒数：265人

H P：http://www.nihs.ed.jp/

## 持続可能なグローバル社会の実現にむけた取組

### はじめに

私たち名古屋国際中学校では、グローバルな社会で活躍できる力を身に付けるために、地方自治体や企業、NPO、他校など外部組織と連携・協力しながら、社会問題に対して実践的な取組を行っている。2016年度よりESD重点校形成事業サステナブルスクールとして、ホールスクールアプローチを展開し、学校全体でESDに取り組んでいる。

また、その中でも特に気候変動プロジェクトに参加し、地球温暖化やその影響による環境問題について生徒が主体的に捉え、具体的な解決策を探究型学習を通して模索している。さらに、生徒の自主性を育むアクティブラーニングなどの多角的な授業方法や評価手法の開発・研究を行っている。

### 実践内容①

### 「学校間交流・外部組織との連携」

ねらい：ユネスコスクールとの交流や名古屋市、NPOなどの外部組織と連携し、実践的取組を実現する。

本校は海外の学校と学校間国際協定を結んでおり、毎年多くの海外の生徒・教員が学校訪問やホームステイを行い交流している。滞在中は、通常授業への参加、お互いの国の民俗芸能や料理の披露、国際問題をテーマとしたディスカッションを通して国際理解を深めている。2017年度は、ESD実践先進校であるサステナブルスクールとの交流を強化している。フィールドワークで広島を訪れた際は、サステナブルスクールの福山市立福山中・高等学校を訪問し、各校の活動発表やアクティビティを通して交流した。現在、気候変動プロジェクトに参加している国内の遠隔地の学校や海外の学校とスカイプを利用した交流を進めている。

また、総合的な学習の時間に「グローバル語り部派遣

事業」を活用し、国連やJICAなど海外でさまざまな国際問題を解決する現場で活躍されている方を講師として招き講演を行っている。特に、近年は生徒との直接対話を重視する形式に移行し、生徒会の生徒中心で企画・運営に挑戦している。教科教育では、例えば理科の授業で、名古屋市環境局や大手電機メーカーの出前授業を積極的に活用し、外部の専門家による実験を通して温室効果ガスや酸性雨、エネルギー問題について考える学習を実践している。これらの授業の多くは、身近な生活からさまざまな環境問題が起こるメカニズムを理解し、実験で体感できる内容となっている。特に、本校は国際教育の一環としてESDを実践しており、授業内容もグローバルな視点で環境問題を捉える工夫をしている。



あかりの授業でエネルギー問題を考える

### 成 果

学校間交流により各校の取組成果を共有することで、互いの活動に対するフィードバックを行い、多角的な視野や多様な価値観を身に付けることができた。また、身近な生活に関わる環境問題に触れ、地域社会の持続可能性について考える機会が提供された。



## 実践内容②

## 「Sus-Teen!の発足と活動」

ねらい：総合的な学習の時間や教科教育で興味関心をもった有志の生徒が主体的に取り組める場を提供する。

昨年度、サステナブルスクールの気候変動プロジェクトに生徒が自発的に活動できる場として「Sus-Teen!」が発足した。生徒自らがやりたいことを企画・立案し、教員のサポートを受けて、活動を実現している。現在、名古屋市環境局の協力のもと、学校の周辺地域の酸性雨・光化学オキシダント・NO<sub>2</sub>などの大気環境を調査している。調査結果は、科学的なデータとして記録し、活動報告会や交流会で報告している。

また、気候変動による災害では、家を無くし生活の困窮

が起こる。台風災害の多いフィリピンを支援するための街頭募金活動や、アパレル企業の子ども服回収活動にも取り組んでいる。

文化祭では、ごみを分別して投入するとリサイクル商品が出てくる「Sus-ガチャ」を企画し、地域住民の方へ3Rの大切さを伝えた。

さらに、これらの活動で得た経験や知識を生かし社会問題を調査・研究し発表するコンテストを定期的で開催している。



手作りのブースによる分別の普及

## 成果

Sus-Teen!の活動を通して、生徒は身近な環境問題をSDGsの観点から分析し、グローバルな視点で理解できるようになった。また、グループワークやフィールドワークを通じ、コミュニケーション力やプレゼンテーション力などグローバル人材に必要なソーシャルスキルを高めることができた。

## 実践内容③

## 「情報発信と校外での挑戦」

ねらい：ESD実践成果を外部に情報発信し、興味関心を高めた生徒は校外の活動で挑戦する。

学校で取り組んだESDの活動成果は、毎年開催される愛知県ユネスコスクール交流会にて発表し、他校と情報交換を行っている。また、本校では毎年年度末にESDの活動成果を外部向けに発表するワークショップを開催している。ワークショップでは、ESDの専門家によるアクティビティを含めた講演や教員によるアクティブラーニング形式の模擬授業も行っており、他校の教員や教育関係者向けにも情報発信している。生徒は、ESD活動で培った

知識や経験を発揮してJICAやWFP

のエッセイや環境フォトコンテスト、環境ポスターコンクールに応募し、入賞者も出ている。また、校外で開催されるワークショップや学生フォーラムに積極的に参加し、名古屋市の海外派遣事業や国連本部への学生派遣に生徒が自発的に応募し、選抜され海外に活動の場を広げている。



報告会でのアクティブラーニング

## 成果

校内でのESD実践や研究成果を外部に情報発信することで、教員や学校は自らの取組に対する客観的な評価を得られる。生徒は校外での活動にチャレンジすることで、情報収集力が高まり、新しいアイデア創出の機会になり、校内へフィードバックされる。

## おわりに

本校のESDの取組が体系化され、ホールスクールアプローチにより再編成されたことは大きな成果である。その結果、総合的な学習の時間や教科教育において、生徒の興味関心を高める動機付けを意識する教員は年々増えている。外部機関と連携することで、ESD活動における学習効果の向上や学校外の方々と交流をする機会の増加、生徒

や教員の情報発信する力の向上に繋がっている。今後は、研究成果を国内外の教育現場や連携機関と共有し、アウトリーチ活動などを通して地域社会への還元を目指したい。さらに、高校課程ではスーパーグローバルハイスクール(SGH)アソシエイトとして、中学での活動を発展させ取り組める場を提供していきたい。



環 境

国際理解

地域文化

気候変動

生物多様性

防 災

エネルギー

そ の 他

# 名古屋市立山田高等学校



創 立：1978年

住 所：〒452-0817 名古屋市西区二方町19-1

連絡先：TEL 052-501-7800 FAX 052-504-2968

学級数：21 生徒数：832人

H P：http://www.yamada-h.nagoya-c.ed.jp

## 命・心・環境を大切に作る人間教育の実践

### はじめに

本校が平成24年12月に「ユネスコスクール」に認定される要因となった、「人間教育」の根幹をなす取組が「若竹プロジェクト」である。校内に若竹プロジェクト委員会（ユネスコスクール委員会）を設置し、全校的な組織としてさまざまな教育実践を企画・運営している。

このプロジェクトでは、『命』『心』『環境』を3つの柱

に据え、それらを大切に作る教育を年間通して実践することにより、「命の尊厳に思いを馳せることができる人間」「自他の心の痛みを理解でき、安定した情緒をもつ人間」「身の周りの自然環境がいかに貴重なものであるかを知る人間」といった「なごや発『地球人』の育成」を目指している。

### 実践内容①

## 「ユネスコスクール交流会での活動報告」

ねらい：交流会に参加することにより、  
若竹プロジェクトへの意識の向上と他校との交流を図る。

本校では3年前からユネスコスクール交流会に参加し、ポスターセッションを通して活動の報告をしている。一昨年度は「防災」をテーマに、本校での防災委員の活動報告や防災新聞の紹介を、昨年度は「性講話」を通じた学びについて報告をした。そして今年度は、『命』『心』『環境』の『心』に焦点をあて、「本と出会い、こころをつなぐ図書委員会の取組」と題して報告をした。

本校では20年前から「朝の読書」という活動が継続して実践されている。始業前の10分間、教室で全校生徒と教職員が一斉に読書をしている。短い時間ではあるが、毎日継続して取り組むことで、落ち着いた雰囲気づくりと豊かな心の育成に成果を上げている。この活動を支え、推進役として中心的な役割を担っているのが、各クラスから2名

選出されている図書委員で構成された図書委員会である。図書委員は学級文庫の点検や整備、図書館内の企画展示、読書会の開催、図書館報編集、購入図書選定と幅広く活躍している。毎年読書週間の時期に開催される読書会では、昨年度に引き続き今年度も「ビブリオバトル」を企画した。小説だけでなく、ノンフィクションやエッセイなどさまざまなジャンルの本が紹介され、本を通じて生徒間の交流を深めることができ、本校生徒の豊かな心の育成に大きく貢献した。

このような図書委員会の活動を、図書委員の生徒が1枚のポスターにまとめ上げ、発表原稿を作り、何度もリハーサルを重ねて交流会に臨んだ。校内の活動に加え、今回の交流会への参加は、図書委員会のみならず、全校生徒の若竹プロジェクトに対する意識の向上に繋がった。



ポスター



ポスターセッションの様子

### 成果

ユネスコスクール交流会での活動報告に参加し、生徒たちは学校での日々の活動について自信を得ることができた。また、図書委員会としても、「本と出会い、こころをつなぐ図書委員会の取組」という観点が、若竹プロジェクトを企画していく際の、新しい視点となることを認識することができた。

## 実践内容②

## 「年間を通した『命』『心』『環境』に関する教育実践」

ねらい：若竹プロジェクトをイベント的な取組ではなく、年間通した教育活動として位置付け、持続可能な実践とする。

若竹プロジェクトとして実践している『命』『心』『環境』に関わる教育活動を紹介していきたい。

## 『命』に関する教育実践

- ・毎年第1学年を対象に「性」に関する講演会を実施し、命の大切さ、他者への思いやりなどについてしっかりと考えることができる機会としている。
- ・第2学年全員が総合的な学習の時間において、AEDトレーニングを中心とした救急救命法の学習をしている。指導資格をもった教員が年間を通して指導することにより、生徒全員に「普通救急救命士」の認定証が授与される。
- ・各クラスから2名の防災委員が選出され、防災新聞の発行、外部の防災施設での研修、非常備蓄食の試食と選定を担っている。また、第1学年全員にHRの時間を使って起震車体験や煙道体験などを実施している。第2学年では修学旅行において、神戸の「人と防災未来センター」を見学している。このような実践で、防災に関する意識の向上を図っている。

## 『心』に関する教育実践

- ・第1学年の家庭総合の授業の中で、「赤ちゃん交流授業」を行っている。名古屋市西保健所の協力を得ながら、近隣の0歳から3歳位までの赤ちゃんとその保護者に来校していただき、子どもが生まれたときの喜びや子育ての楽しみや苦勞などを話していただくとともに、実際



救急救命法実習の様子

に生徒が赤ちゃんをあやしたり、一緒に遊んだりできる機会としている。



赤ちゃん交流授業の様子

今年度は7時間の授業に延べ100組以上の参加があり、生徒たちは穏やかな時間を過ごすことができた。

- ・本校の西側には特別養護老人ホームが隣接している。その施設に美術部と写真部の作品を展示し、入居者の方々に楽しんでいただいている。また、アンサンブル部は毎年クリスマスの時期にコンサートを実施し、入居者と交流している。生徒はこのような活動を通して、他者を思いやる心や優しさを育んでいる。

## 『環境』に関する教育実践

- ・第2学年全員が総合的な学習の時間において、学校北側を流れる新川の水質調査を継続的に行っている。水を採取し、水質を検査して経年変化などのデータを整え、名古屋市科学館主催の科学の祭典でポスター発表をしている。身近な環境問題に課題を見つけながら、地球規模の環境問題に対して関心を高めている。
- ・全校生徒と教職員、保護者で「若竹クリーンプロジェクト」と称して、地域の清掃活動を行っている。生徒はこの活動を通して、環境問題について考えること以外に、ボランティア精神も育んでいる。

## 成果

若竹プロジェクトをイベント的な取組ではなく、年間通した教育活動として位置付け、学校教育活動全般を通して、継続的に実践することにより、生徒たちは『命』『心』『環境』に関する意識が非常に高まり、人間教育の成果が着実に積み上げられている。

## おわりに

本校が長年にわたり取り組んできた人間教育に関する教育実践は、学校教育活動全般を通して継続的に行ってきたことにより大きな成果を上げてきた。その取組がユネスコスクール認定の要因となり、さらに生徒たちの若竹プロジェクトに対する意識を向上させ、活動を活発にさせてきた。現在では、山田高校の特色ある教育活動として、さまざま

な場面でPRするとともに、ユネスコスクール交流会などを通して、他校とも情報交換や交流ができるようになってきた。今後は、『命』『心』『環境』を3つの柱に据えながらも、時代とともに変わる課題にも向き合い、若竹プロジェクトの取組が、生徒の健やかな成長により一層寄与できるように努めていきたい。



環 境 国際理解

地域文化 気候変動

生物多様性 防 災

エネルギー その他

## 愛知県立刈谷高等学校



創 立：1918年

住 所：〒448-8504 刈谷市寿町5-101

連絡先：TEL 0566-21-3171 FAX 0566-25-9087

学級数：30 生徒数：1,204人

H P : <http://www.kariya-h.aichi-c.ed.jp/>

## SSHとともに進むユネスコスクール

## はじめに

本校は平成23年度からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、科学的見地から国際社会における諸問題の解決に取り組む態度と能力を養うことを目的として、ユネスコスクール活動を展開してきた。将来さまざまな方面でリーダーとしての活躍を期待される本校生徒が、幅広い視点をもって課題解決に取り組むことは非常に重

要であると考えられる。ユネスコスクールとして本校では、全校生徒による「刈谷市および周辺地域の在来種植物調査」と、スーパーサイエンス部（SS部）の「国指定天然記念物小堤西池のカキツバタ群落の保全」に向けた調査を継続して、成果を地域へ還元することで環境保全への大切さを訴えている。

## 実践内容①

## 「刈谷市及び周辺地域の在来種の分布調査」



ねらい：自然環境への意識を高めるため、周辺校・地域住民とともに活動をする。

この取組は全校生徒が参加するもので、自宅周辺の決められた区域内に生息する指定在来種植物の生息状況を、春と秋の年2回調査している。所在地である刈谷市については、市内を500m四方の区画に区切り市内在住の生徒に割り当て、不在区画へはSS部が出向いて調査を行っている。市外在住の生徒は自宅周辺の調査を行うことで、周辺地域へも調査範囲を広げている。

調査日時と対象は、次の通りである。

- ①春の調査 4月下旬～5月上旬、植物種22種
- ②秋の調査 9月下旬～10月中旬、植物種17種

この取組の開始当初は夏も調査をしていたが、夏の調査期間には花をつけない植物が多く、同定が困難であったため

春と秋の年2回とした。今年度で4年目になり、データは徐々に蓄積されている。

さらに昨年度からは、インターネットを活用した植物の確認と報告をできるようにした。これによりデータ数が増え、今後他の高校や小・中学校と協力して活動するための足がかりができた。

これまでの調査から、

- ①河川の周辺は多様性が高く自然が残されている。
  - ②鉄道周辺は多様性が低く、工業化で自然が失われている。
  - ③多くの地域でニホンタンポポの減少が見られ、本来の植物分布が失われつつある。
- などのことが分かってきている。

しかし、データの信憑性の問題もあるので、調査方法の改善が必要である。

## 成 果

調査の状況や成果を校内で発表し、また愛知県環境イベント「Let'sエコアクション in AICHI」や刈谷市環境推進課と連携した「植物観察会」などで、一般の人たちへ自然環境保全の大切さを広める一助を担うことで、生徒たちの自然環境への意識が大いに高まった。





## 実践内容②

## 「天然記念物『小堤西池カキツバタ群落』の保全活動」

ねらい：小堤西池に自生している天然記念物の  
カキツバタの保全を多方面から試みる。

刈谷市の北部にある小堤西池は、京都・大田ノ沢、鳥取・岩美町の唐川と並ぶ日本三大カキツバタ自生地の一つで、昭和13年に国の天然記念物に指定された。カキツバタは、しばしば花をつける量が極端に少なくなってしまうことがあり、大田ノ沢も刈谷隣接の知立市・無量寿寺（ここは自生地でないが）でもそういう現象が起きている。これは、群落の手入れの問題だけでなく、遺伝的多様性の欠如が大きな要因ではないかといわれている。

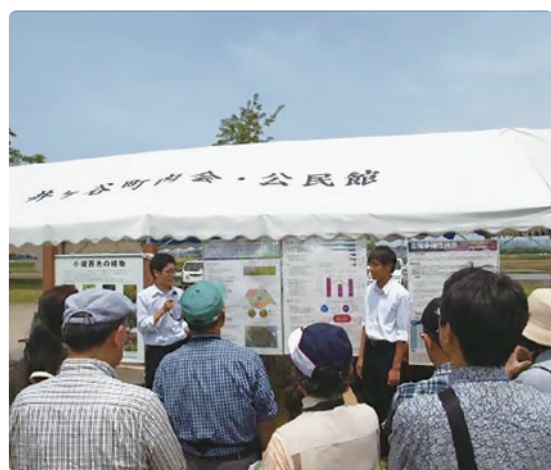
そこで、本校のSS部が愛知教育大学渡邊幹男教授の指導のもとで遺伝的多様性の有無を明らかにするとともに、種子繁殖個体の保全方法について研究を行っている。

具体的な活動は、次の通りである。

- ① 4月、重要地域杭打ち、外来種亀捕獲
- ② 5月、市民説明会、野外調査
- ③ 6月、サンプリング、遺伝子解析
- ④ 9月、種子サンプリング、除草作業

解析結果を基にした除草の方法や場所、水位調節の提言に対して、刈谷市文化観光課の協力を得て、保全に向けた新たな具体的対応策がとられることになった。

また、カキツバタの開花時期に合わせて市民対象の成果報



市民対象成果報告会

告会を現地で行い、好評を得た。地域とのつながりという面からも生徒にとって貴重な体験であり、本校の活動を多くの方々に理解をいただく

ことができ、非常に有意義な機会であった。

これまでの研究で、

- ① 地下茎で繁殖する「株個体」より、種子で繁殖する「実生個体」の方が遺伝的多様性は高い。
- ② 遺伝的多様性が高い翌年は、開花数が大きく増加する。
- ③ 水面に落ちた種子が北風に流され一定区域に集まるので、湿地内での遺伝的多様性に片寄りができる。

ことが確認された。

今年度は、カキツバタの種子を採取し、その発芽に対しての研究を行っている。種子で繁殖する「実生個体」を増やしていくことが遺伝子の多様性を保つためのポイントであるが、カキツバタの種子からの発芽・成長の率は高くない。発芽・成長に適した気温や水量などの外的要因と、遺伝子的に優位な個体の発芽に取り組んでいる。



除草作業

## 成果

研究成果は校内生徒成果発表会、全国生徒研究発表会、AITサイエンス大賞、益川塾シンポジウム、湿地サミット等で発表し、多くの賞を受賞することができた。また、刈谷市文化観光課と協力した市民対象の研究報告会で、自治体や地域との連携を大いに深めることができた。

## おわりに

在来種の分布調査もカキツバタ群落の保全も単期間で多くを解明できるものではない。本校では、数年間にわたって研究してきたことで、植物種ごとの出現地域の分析が行え、カキツバタの植生の特徴をつかみ、個体数の増加への糸口をつかめる状況になってきている。今後も多くのデータを集めることは必要であり、そのデータの

信憑性を上げることが課題である。そのため、地域住民、小学校・中学校・大学などの教育機関、刈谷市文化観光課などの行政との一層の協力が重要であり、これまで以上に連携を深めたいと考えている。そして、研究の成果を地域や団体の財産として還元できる方法を模索していきたい。

## 愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりをねらいとして、日頃ESD活動に取り組む小学校・中学校・高等学校、特別支援学校、大学が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子どもたちが学び合いました。ここに集う子どもたちの輝く笑顔は、わたくしたちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

当日は、ユネスコスクールを中心とした小学校から大学までの児童生徒や教職員等約250名が集い、活動発表や意見交換を行いました。

※上記のほか、ワークショップには延べ200名ほどの参加がありました。

**日時** 平成29年10月29日(日) 正午から15時

**会場** 東海市芸術劇場・大屋根広場（住所：東海市大田町下浜田137番地）

**主催** 愛知県教育委員会

**協賛** 東海市教育委員会

**後援** 日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

## ポスターセッション

※当日は、台風21号の接近により、一部プログラムを変更し実施しました。

① 12:00～12:15	<p>江南市立宮田小学校 ……地域・人とのつながり</p> <p>岡崎市立新香山中学校 ……生態系を守る低炭素社会の実現にむけて</p> <p>名古屋市立北高等学校 ……北高生の異文化体験 ～多文化共生社会を目指して～</p> <p>名古屋市立山田高等学校 ……「朝の読書」を中心とした図書委員会活動</p> <p>中部大学第一高等学校 ……にっしんCOOL CHOICEプロジェクト</p>
② 12:15～12:30	<p>東浦町立藤江小学校 ……野鳥などを通して地域の環境について考えよう</p> <p>名古屋市立丸の内中学校 ……私たちが学んだ伝統文化</p> <p>名古屋市立名古屋商業高等学校 ……葦からZoo Beyond（あしからずう びよんど）</p> <p>豊橋中央高等学校 ……リアカーボランティア</p>
12:30～12:40	質疑応答



## 交流会プログラム

※プログラムの順番を変更して実施しました。

※当初予定をしておりました、豊橋市立前芝中学校は、暴風警報の発令により、発表は中止となりました。

12:45～12:50

## 開会行事（主催者挨拶）

愛知県教育委員会 生涯学習スポーツ監 橋本 礼子

12:55～14:00

## 分科会（ユネスコスクール活動発表）

## 小学校部会（大ホール）

## 半田市立有脇小学校

## 「地域とともに進めるESD活動」

～環境保全活動・稲作体験活動・日本文化体験活動を通して～

ため池を守る、田んぼを守る、日本文化を守るという心意気で取り組んでいる

上記各種活動を報告

## 西尾市立西尾小学校

## 「ふるさと西尾のよさをみんなに語りたい」

～小学校生活6年間で地域に愛着をもつ活動を通して～

「川の環境を考える活動」「祭りのよさを実感する活動」「西尾の町をPRする活動」についての報告

## 北名古屋市立師勝小学校

## 「地域の伝統文化を守り、育てる」

～公民館・地域との連携を中心とした実践を通して～

「学校紹介」「能田徳若万歳」「平成28年度の取組」「平成29年度の取組」について報告

## ●ディスカッション・ファシリテーター

犬山市立東小学校 教諭 酒井 俊輔 氏

## 中学校高等学校部会（リハーサル室）

## 名古屋国際中学校

## 「Sus-Teen! “若者らしく、SDGs”」

SDGs目標（貧困・気候・平和）に関するSus-Teen!の実践報告

## 愛知県立豊田東高等学校

## 「豊田東高等学校におけるESD」

～環境教育・国際理解教育・地域連携教育～

地域や社会の人々、海外の人々との交流や、自然とのふれあい活動を通して、

視野を広げるESD活動を報告

## 名古屋市立工業高等学校

## 「ものづくりはひとつづくり」

名古屋市科学館特別企画「名市工パーク」、文化祭作品の製作から地元企業への

展示までを報告

## ●ディスカッション・ファシリテーター

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

教育協力部 兼 人物交流部 部長 進藤 由美 氏

中部大学 准教授、中部ESD拠点 事務局長 古澤 礼太 氏

14:00～14:15

## まとめ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

教育協力部 兼 人物交流部 部長 進藤 由美 氏

14:15～15:00

## 基調講演

演題：「ほんとうの環境問題」

講師：生物学者、早稲田大学教授 池田 清彦 氏



ワークショッププログラム 11:00~13:30

※当日は、台風21号の接近により、屋内で実施。  
また、実施時間を13:30までと短縮して実施しました。

<p>① 名古屋市立 名古屋商業高等学校</p>	<p><b>おえかきボタンを作っちゃおう!</b> 葦(あし)から作られた布に好きな絵を描いてもらい、それを“くるみボタン”に仕立ててプレゼント</p>
<p>② 中部大学第一高等学校</p>	<p><b>トライ! COOL CHOICE</b> COOL CHOICEゲームを通して、環境問題やエコにアプローチ</p>
<p>③ ESDコンソーシアム愛知 ~愛知教育大学生によるものづくり~</p>	<p><b>木でつくるものづくり ~僕・私・家族のために~</b> 写真立て、風鈴、円形木琴、クロスパズル、スライド、小箱</p>
<p>④ あいち自然観察会(知多)</p>	<p><b>自然のおめぐみを利用しオモチャを作ろう</b> 小丸太をカットし小枝を使ってヤジロベイ作り 木の実、木の葉、草の茎などを使って笛、手裏剣作り</p>
<p>⑤ 日本冒険教育協会</p>	<p><b>かんたん! ECOランタン作り</b> 使用済みの空き缶を使って、オリジナルランタンづくり 廃油を使って、ローソクづくり</p>
<p>⑥ あいちの未来クリエイト部</p>	<p><b>楽しいゲーム等を通じて、環境について考えてみよう!</b> 「あいちの未来クリエイト部」の参加校が作成した環境学習プログラムの実施 参加校: 愛知県立木曾川高等学校、愛知県立安城南高等学校</p>
<p>⑦ もりの学舎</p>	<p><b>自然であそぼう! つくろう!</b> 自然や生き物の繋がりを考える「葉」づくり 葉っぱを使った自然あそび体験</p>

参加申込校

<p>名古屋市立内山小学校 名古屋市立宝南小学校 尾張旭市立旭小学校 北名古屋市立師勝小学校 犬山市立東小学校 江南市立宮田小学校 あま市立基目寺小学校 半田市立有脇小学校 半田市立板山小学校 東海市立船島小学校 東浦町立藤江小学校 東浦町立緒川小学校 刈谷市立富士松南小学校</p>	<p>西尾市立西尾小学校 知立市立知立南小学校 豊橋市立花田小学校 豊橋市立羽根井小学校 豊橋市立牟呂小学校 豊橋市立汐田小学校 豊橋市立福岡小学校 豊橋市立中野小学校 豊橋市立磯辺小学校 名古屋市立丸の内中学校 半田市立亀崎中学校 東海市立上野中学校 岡崎市立新香山中学校</p>	<p>安城市立安城南中学校 豊橋市立羽田中学校 豊橋市立牟呂中学校 豊橋市立南陽中学校 豊橋市立前芝中学校 名古屋国際中学校 名古屋市立北高等学校 名古屋市立山田高等学校 名古屋市立名古屋商業高等学校 名古屋市立工業高等学校 愛知県立熱田高等学校 愛知県立木曾川高等学校 愛知県立津島北高等学校</p>	<p>愛知県立豊田東高等学校 愛知県立岡崎北高等学校 愛知県立刈谷北高等学校 愛知県立安城南高等学校 愛知県立安城南高等学校 中部大学第一高等学校 豊橋中央高等学校 愛知県立豊橋聾学校 愛知県立みあい特別支援学校 信州大学 愛知教育大学 中部大学 (順不同)</p>
--	---	---	---



## 当日の参加者の声

### 今日の交流会についての感想

小学生	他の学校の総合学習について学ぶことができ、とてもいい機会になりました。また、自分にとって、たくさんの方に自分の思いを話すことで自信もついたり、よい経験となったのでよかったです。
教職員	交流会は必要だと思います。会場の一般の方々がよく集まる場所で設定（久屋広場、オアシス21、金山駅など）。ユネスコスクールの大会なので、知事等も参加するとアピールができる。生徒子どもたちの良い活動をアピールするために、人を集める方法を考える（会場、ゲストなど）ユネスコスクールの加盟の多い地域での開催。
高校生	普段、高校同士での交流が多いので、小学校や中学校との交流ができたのが、とてもよい経験となりました。
小学生	本日の交流会で、特に分科会が参考になりました。どんな学校も地域とのつながりや伝統を守るという考えが似ていると思いました。僕の学校でも草花遊びや盆踊り、大根作りやもちつき体験など、昔から受け継がれているものがたくさんあります。それらを守る考えが増えるように、この考えがなくならないように努力したいと思いました。
大学生	私はESDというものを知らなかったが、社会で生きていくため、その社会で生きていくための発展に子どもたちの考えや、力は大切。この教育に力を入れることは重要であるとともに、その理解がどこまで進んでいるのかを知り、大変興味をもった。
教職員	他校、他地域で行われている取組を知ることができ、ESDへの取組について考えることができました。各校で取り組んでいることは、地域や国際という縦のつながりが多くあります。自分たちの力で考え、大人になってもやりたいという思いになってくれるといいなと思います。
行政	分科会の学校と行政のつながりが基盤になっているという内容があった。自分の地域でも今後、よりそのつながりを築く重要性を感じた。
教職員	各学校で実践している取組を聞くことができ、今後の活動の参考となった。自分の学校で取り組むことができそうなものは取り入れていきたい。
教職員	中高の部に参加させていただいたが、オリジナリティあふれる報告で、ESDをどうとらえるか非常に有益でした。
中学生	自分の学校でやっていないことも聞けて、学びが深まった。自分の学校でもやりたいと思う活動もあった。



## 当日の参加者の声

### ユネスコスクールやESDの活動の充実のために、必要だと思うこと

教職員	今日のような交流の場をつくること、子どもたち同志の交流（各校による取組）ができるといいなと感じています。
保護者等	地域の人々とのつながりがとても大切だと感じました。小学校を卒業した後も子どもたちが続けて参加できるようになるとよいと思いました。
小学生	地域の人とのコミュニケーションを取り、活動を広めていくことが必要だと思います。
大学生	地域への連携をより大きく広め、地域の教育に対する十分な理解。学校で学ぶことを知ってもらう。試験のための勉強ではなく、社会で生きるための勉強をしていくことなど。
教職員	今回のような横のつながりを広げることで、自校で目を向けていなかったことにも気付くことができるので、各校の取組を伝え合い、また同世代の交流協力をすることで、活動を共有し、広げていくこともユネスコスクール同士での活動として取り組んではいかがでしょうかと思います。
教職員	こういった交流会に、多くの小中学校が参加できるとよいと思います。
教職員	先生たちの意識の向上。きっかけづくりをどうしていくか。
教職員	将来の社会や環境について子ども～大人、障害者～健常者が膝を突き合わせて考えたり、議論したりする場を作る。
教職員	やはり身の回りの何気ないことに問題意識をもつことで、世界の問題も身近に感じる事ができると思います。
教職員	やりたいことができる校内の環境。 ESDの考え方や具体的な活動内容の周知。
保護者等	地元活動の取組を一人でも多く参加し、守っていくこと。 薄れていく伝統を次の世代につなげていけるよう頑張ってください。
教職員	これからも情報の共有をしていくことが必要だと思います。なるべく負担を小さくしながら、それが可能となるような工夫も必要だと思います。





**ユネスコスクール活動事例集 第5集**

平成30年3月発行

愛知県教育委員会生涯学習課

〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電話 052-954-6749 (ダイヤルイン)

ファックス 052-954-6962